ゴルテュンの *neotas*

Riet van Bremen
The Gortynian *neotas*

岡　田　泰　介
Taisuke Okada

解説

本稿は、2016 年 3 月 25 日に東京大学でおこなわれた Riet van Bremen 博士の講演の邦訳である。ヘレニズム史の専門家である博士は現在、UCL（University College London）において Senior Lecturer として教鞭を執っている。クレタの有力ポリスであるゴルテュンの *neotas* をめぐっては、これまでさまざまな解釈が提起されてきたが、関連史料の絶対的な乏しさのため、その実体には依然として不明な部分が多い。有力な仮説として、まず、*neotas* を、前 3 世紀末にゴルテュンで発生した内戦をきっかけに、既成の保守的な貴族政に対する改革の一端として、若者を中心に創設された組織とみるもの、つぎに、辺境地域の警備、とりわけ国境を越えて移動してくる移牧家畜の管理にあたった若者の組織とみるもの、の二つがある。この講演において van Bremen 博士は、近年公刊された二点を含む五点の碑文の分析にもとづいてそれら二つの仮説を批判し、ゴルテュンの *neotas* は、おそらく前 5 世紀に創設された下級役人団であり、それはエリートの若者の見習い制度として、貴族政の一環をなすものであったとの見通しを示している。

講演

世代間の暴力的な対立を描いたポリュビオス 4 巻(53-55 章)の長い一節は、ぎょっとさせるものです。それはクレタのポリスであるゴルテュンで、クノッソスとリュットスとの戦争（前 221〜219 年）の文脈のなかでおこった内戦のよく知られた話です。

クノッソスとゴルテュンという二つの有力なクレタのポリスとそれぞれの同盟諸市のあいだで、前 222 年に合意が成立した結果、クレタ島の大半が統合され、クノッソスが主導権をにぎるクレタ人のコイノンが復活しました。このできたばかりの同盟は、つぎに、有力ポリスであるリュットスを服属させようとしました。こうして、おそらく前 221 年に勃発した戦争は、コイノン内部に亀裂を生じさせました。クレタ西部の幾つかのポリスはコイノンから離脱し、リュットス人に味方しました。ポリュビオスの分析によると、ゴルテュンでは、若者である *neoteroi* または *neoi*（ポリュビオスは両方の語を用いています）と年長者である *presbyteroi* または *presbytatoi* が、それぞれ違う側に味方しました。若者たちがリュットス人を支持した一方、*presbyteroi* はクノッソス人のリュットス掌握のこころみを応援しました。年長者たちは要塞を占拠し、クノッソス人と急きょ召集された 1000 人のアイトリア人部隊の援けによって、どうにかしてそれを保持しました。

多くの若者たちが殺され、生き残った者たちはポリスから追放されました。後日談によれば、これらの亡命者たちはファイストスの港（マタロン）を攻撃して奪取し、さらに、大胆にもゴルテュンの港（レベナ）をも奪取して、おそらく保持（*diakateichon*）し、それらを根城に、中心市に拠る年長者の一派と戦い続けたということです。この紛争の地理的配置ははっきりしません。すなわち、ポリュビオスが 53 章 9 節で「*presbyteroi* はアクラを掌握した（*presbyteroi katalambanomenoi ten akran*）」といっている要塞すなわちアクラは、ほぼこの時期の多くのゴルテュンの史料のなかに「上の町（ἄνω πόλις）」として言及されているものと同じだと主張されており、いくらかは筋が通るでしょう。しかしながらこの名称は、[別の]二つの史料では、「下の町（κάτω πόλις）」

と対をなして、それぞれゴルテュンとファイストスを指しているようです。なぜなら、これら二つのポリスは、前 3 世紀後半のある時点で、ゴルテュンが主導権をにぎるシュンポリテイアで結ばれていたからです。若者たちがどこへ避難したのか、そして彼らがどんな有利な地点から、ファイストスとゴルテュンそのものの港をなんとか奪取することができたのかについて、ポリュビオスは沈黙しています。

Paula Perlman は、*Inventory of Archaic and Classical Greek Poleis* のレベナの項目で、「Strab.10.4.11 によれば、レベナはゴルテュンの *emporion* であり、おそらく、リュットス戦争の際にゴルテュンで発生した内戦のあいだゴルテュンの *neoteroi* によって保持された辺境要塞は、レベナとみなすべきだろう」と述べています。

はっきりしているようなのは、これらの行動が、*neoi*（若者）と *presbyteroi*（年長者）のあいだの断絶を補強し強固にしたことです。それは、プラトンとアリストテレスが二人とも警告している、「年長者」と「若者」の潜在的な対立という筋書きを最後までやり通すことでした。ポリュビオスの記事は、クノッソス人がヘルメイアスを顕彰した決議碑文によって劇的にうらづけられます。彼は、ゴルテュン人の依頼で、負傷者の手当てをするためにクレタに来たコス島の医師です（ゴルテュンも同一人物を決議によって顕彰しています）。この決議碑文は、初期の内戦と港が奪取されたあとの経緯の両方にふれています。4 行目には、「ゴルテュンで内戦が拡大していたとき、われらは、同盟協定のとり決めにしたがい、ゴルテュン人のポリスに広がった戦いにくわわり、われらの同胞市民たちと同盟者たちの幾人かが小競り合いのなかで負傷した。そして、傷の結果、多くの者が、まれにみるほど重篤な合併症（病気）に苦しむにいたった」とあります。

同じ決議の 15〜20 行目は、「そして、ファイストスをめぐってさらなる戦いがおこって大勢を負傷させ、病んだ人々の命に深刻な脅威がせまったとき、彼（ヘルメイアス）は、彼らを治療するために力をつくし、重大な危険から救った…」と語ります。

この戦争中のある時点で、アカイア人の将軍フィロポイメンが、ことによる

とマケドニア王アンティゴノス・ドソンにそそのかされて、クレタへやって来ました。前 221 年にドソンが死ぬと、跡を継いだ若いフィリッポス五世は、クレタ問題に介入し、反クノッソス陣営を支援しました。のちのある時点で、フィリッポスはクレタ人のコイノンの *prostates* となるでしょう。フィロポイメンは、フィリッポスと同じく（Paus.8.49.7 と Plut.*Phil*.7.1-2 から知られるように）反クノッソス陣営を支援しました。戦争はすぐそのあと（前 219 年または前 218 年）終わりました。マイアンドロ河畔のマグネシアが、そこで発見された顕彰決議（*I.Magnesia* 65）が伝えるように、両陣営のあいだをとり持ちました。その後の展開から考えて、より大きな衝突において、（ポリュレニア人とリュットス人が主導する）反クノッソス陣営が勝利をおさめたようです。ゴルテュンでは、*neoteroi* が勝ったか、それとも、なんらかの和解が成ったのかもしれません。ドレロスのエフェボイ（クレタでは *agelaoi* とよばれます）のよく知られた宣誓（お手もとの配布資料にその短い抜粋が載っています）は、前 3 世紀初頭以来ドレロスがクノッソスの同盟国であったという、まさにその文脈のなかでこそ、正しく理解することができます。この碑文は、間接的に、ゴルテュンの状況にふれています。

ゴルテュンの内戦における *neoi* の役割は（つまり、ポリュビオスの分析にいくらかでも真実とのかかわりがあるとみなすことができるならば、ということですが）これまでずっと、碑文史料からのみ知られる *neotas* という、独特であまりよくわかっていないゴルテュンの組織と結びつけられてきました。今日わたしが皆さんにお示ししている碑文はすべて、やや救いのないことに「若者」や「青年」としか翻訳することができない、この組織にかかわる史料です。碑文のうち三つは既知の史料、ほかの二つは最近刊行されたばかりの史料です。

neotas とゴルテュン内戦にかんするポリュビオスの記事との関連は、むろん興味をそそります。多くの学者は二つを結びつけ、*neotas* のグループの組織を、内戦の直接の結果として、おそらくそれに相当する「年長者」の組織と対をなして設置されたとものと考えてきました。*preigistos*、複数形 *preigistoi*（*presbytatoi* のクレタ方言形）がそれです（これはゴルテュンだけにあったものではありませんが、ゴルテュンでは単独の役人としてだけ知られています）。

わたしはのちほど *preigistos* の意味と、その妥当性にたち戻ることにします。

neotas を、ほかの史料に登場する集団 *neoi* にまさしく相当するものと考える説もあり、それを疑問視する説もあります。ほかにも、この組織を、ポリュビオスが、前 218 年にアイトリア人とフィリッポス五世の双方の軍隊に、前 217 年のラフィアの戦いではプトレマイオス［四世］とアンティオコス三世の軍隊にくわわっていた部隊と結びける説が、依然としてあります。これらの部隊は、一般のクレタ人と区別されて、ネオ＝クレテスとよばれました。このあきらかに短命に終わったクレタ人軍隊のカテゴリをめぐって、さまざまな説明がこころみられてきましたが、申し分のない説明はひとつもありません。Nicholas Sekunda は、2011 年に公刊された論文のなかで、これらのネオ＝クレテスが、クレタ人の *neoi*、すなわちほかの史料にみられる *neaniskoi* に相当するようなものにほかならないと主張しました。この仮説は、ずいぶん前にクレタの専門家 R.F. Willetts が提起したものですが、広く支持されることはありませんでした。Sekunda は知らないようですが、1985 年にも、Angeliki Petropoulou が、ある本のなかで同じ説をむしかえしています。率直に言って、わたしはこの「新解釈」を支持しません。理由は簡単で、複合名詞のなかでは、修飾要素としての *neo-* は、つねに「あらたに」や「最近」という意味だからです。したがって、この語は、厳密な意味がなんであるにせよ、「あたらしいクレタ人」と解釈されなければならず、そのことは、私見では、Sekunda の解釈を無効にします。

彼が引用している、マケドニア王デメトリオス二世とゴルテュン人とのあいだに前 237 年か前 236 年に締結された興味深いシュンマキア協定さえ－そのなかではゴルテュン人がことによると *neaniskoi*（若い）兵士を送ることを約束しているのですが－どのような点でも、Sekunda の見解をうらづけるのには役立ちません。もっともシンプルな解決法は、クレタ人のこのカテゴリを、あらたに市民権を与えられた人々とみなすとともに、正確なコンテクストを復元することはできないとみとめることのように思われます。

さて、ゴルテュンの内戦とその *neotas* との関係をより詳しく見てみましょう。オンライン以外には公刊されたことのない Florence Gaignerot-Driessen の論文の引用から始めます。なぜなら、それは極端な仮説をもっとも明確に

ーたとえかならずしも正しくはなくとも―提起しているように思われるからです。この筆者は、若者の離反をつぎのように解釈します（引用し、翻訳します）「非常に保守的な既存のゲルーシアに拮抗するあたらしい政治的集会である *neotas* の出現　*neotas* という用語は、この集会が、ゴルテュン人の二つの党派の対立に欠くことのできない *neoi* によって構成されていたことを思わせる」

ゴルテュンのゲルーシアについてはなにも知られていないという事実を別にして、ここに示された論理展開は一定の歴史的な論理性という魅力を持っています。しかし、かりにそのような直接の因果関係をみとめるなら、*neotas* が登場するいかなる史料も、前 3 世紀の最後の 20 年間よりも前のものではないことを示すことができねばならないでしょう。あとで見るように、この前提は、自明というわけではありません。字体にもとづく議論はいつも問題ぶくみですが、ヘレニズム期のクレタについては、碑文の編年はかなりよくわかっています。そして、関係する碑文のほとんどには、おおむね前 3 世紀後半に年代づけられそうな特徴があります。一つのケースでは、校訂者は用心深く「前 3 世紀」と推定しています。これらの年代措定は、ひとつとして厳密ではありません。もっとも有名な碑文、お手もとの配布資料の No.4 の、いわゆる銅貨にかんする決議の年代にすら議論があり、推定年代は、前 260～250 年ごろから「前 3 世紀末（Chaniotis）」にわたっています。わたしのみるところ、この碑文の年代は、まさしくリュットス戦争との関係のゆえに議論のまとになっているのです。そういうわけで、ありえる関連をただちに除外することはできませんが、それを前提とすることもできません。肝心なのは、*ha neotas* とよばれるグループの存在は、ゴルテュン市民団の老若の区分が、なんらかのかたちで制度化されていたことを示唆している点です。

わたしがしようとしていることはシンプルです。すなわち、碑文そのものを綿密に読み、それらについてたてられたさまざまな仮説を検証することで、ゴルテュン人の *neotas* の実体と機能にかんする、まったくばらばらで、ときに大胆な学説を解きほぐそうというのです。

もっとも有名な碑文、論議のまとになってきた、年代のはっきりしない、銅貨の使用にかんするゴルテュンの決議から検討を始めます。この碑石の、

Inscriptiones Creticae IV から転載した写真がスクリーンに写っています。ほとんどの解説者によれば、この碑文は、前 3 世紀後半の典型的なヘレニズム期の字体を示しているといわれていて、反対する理由はまったくありません。Angelos Chaniotis は、三日月状のシグマが前 4 世紀後半からクレタの碑文にあらわれることをみとめていながら、銅貨にかんする決議にみられるこの種のシグマを前 3 世紀後半の特徴とみなしています。彼がその根拠とした三つの碑文のいずれも、個別に年代措定されたものではないのですが。

建築用石材の片側に刻まれているこの決議は、あたらしい銅貨の排他的な使用にかんするものですが、*neotas* とよばれるグループに、この決議の履行にさいして係争がおきた場合の裁定と、敗訴した側から罰金徴収をゆだねています。方言はクレタのものであり、そのためたぶん少し見慣れないでしょう。

[θιοί].
[τάδ' ἔϝαδε τ]ᾶι [πόλι] ψαφίδδονσι τρια-
[κατίων π]αριόντων —— νομίσματι χρῆτ-
4 [θα]ι τῶι καυχῶι τῶι ἔθηκαν ἁ πόλις· τὸδ
δ' ὀδελὸνς μὴ δέκετθαι τὸνς ἀργυρίος.
αἰ δέ τις δέκοιτο ἢ τὸ νόμισμα μὴ λείοι
δέκετθαι ἢ καρπῶ ὠνίοι, ἀποτεισεῖ ἀρ-
8 γύρω πέντε στατῆρανς. πεύθεν δὲ
πορτὶ τὰν νεότα, τᾶς δὲ νεότας ὀμν-
ύντες κρινόντων οἱ ἑπτὰ κατ' ἀγοράν,
οἵ κα λάχωντι κλαρώμενοι. νικῆν δ' ὅτε-
12 ρά κ' οἱ πλίες ὀμόσοντι, καὶ πράξαντες
τὸν νικαθέντα τὰν μὲν ἡμίναν [τῶι νι]-
[κάσ]αντι δόντων, τὰν δ' ἡμίναν [τᾶι πόλι].

「神々　三百人の列席のもと、ポリスは以下のように決議した。ポリスが定めた銅貨を使用せよ。銀のオボロスを受けとってはならない。もしなんぴとかが（銀のオボロスを）受けとったり、（銅の）貨幣を受けとろうとしなかったり、穀物と交換に売るならば、銀 5 スタテル（の罰金）を支払え。*neotas* に通報せ

よ。*neotas* から抽選された七人は、アゴラで、宣誓したうえで裁定せよ。（七人の *neotas* のうち）より多くの者が宣誓した側が勝ちとし、（七人の *neotas* は）敗訴した側から（罰金を）徴収し、一方で半分を勝訴した側に与え、他方で半分をポリスに与えよ」

さて、歴史学的に解釈するうえでむずかしいのは、8〜10 行目です。*kat' agora* 「アゴラにおいて」は、直接に *hoi hepta* と関連づけて読むことができるでしょう。つまり「アゴラにいる七人」となります。このため、Willetts は「七人」をアゴラノモイと考えます。Giovanni Marginesu は、彼の *Gortina di Creta* 50 n.75 において、アゴラノモイは、ゴルテュンでは前 1 世紀（*IC* IV 251-255）になって初めてあらわれると指摘しています。彼の主張は、わたしには、反論というより賛成論のようにみえます。しかし、彼はまた、たとえば養子縁組を含む、あらゆるたぐいの公的・法的な業務において、アゴラは中心的な位置を占めたとしています。つまり彼は単純に、アゴラを、裁定がくだされることになっていた場所と考えているのでしょう。それは、もちろん、取引と両替がおこなわれた場所でもありました。したがって、たとえ *kat'agoran* を称号の一部とみなさないとしても、それは「七人」の持場としてのアゴラを意味していると考えることができるかもしれません。

けれども、碑文の内容はこの説明より複雑で、それを正しく理解することは、*neotas* の役割をよりよく理解することを意味します。ほとんどの解釈者は、これらの行を、翻訳が示しているように、「七人」は *neotas* のなかから選ばれたという意味に理解してきました。しかし、クレタの法碑文の専門家である Paula Perlman は、私信のなかで、ゴルテュン法典の文言との類似性をわたしに教えてくれました。すなわち、法典では、*omnuntes krinonton* に相当する表現は、前に属格（ここでは *tas de neotas*）をともなっており、その属格の語が、*omnuntes* が裁定する案件であることを示しています。彼女はまた、*ha neotas* は、ここではグループではなく単独の役人を示しているかもしれないと示唆しました。しかし、わたしは、あとの方の解釈は彼女のもう一つの解釈よりも説得力に欠けると思います。とりわけ、Monique Bile が、この箇所のような単数

名詞の集合名詞としての用法を明確に示しているからです。しかし、かりにPerlman のもう一つの仮説をうけいれるなら、この碑文に描かれている手続きを、つぎのように想像することができるかもしれません。

誰かが、どこかの商人が新しい銅貨の受けとりを拒否するところを目撃します。彼は *neotas* にその商人を告発します。*neotas* には、この段階で執行すべき職務（情報を書きとめ、調査し、証人を見つけだす）および、その案件をさらにとりあげるか否かを決める職務があったにちがいありません。「七人」とよばれる役人団は、抽選されます（選出母体は不明です）。彼らは宣誓し、アゴラで文字どおりには「*neotas* について」、意味上は「*neotas* によって彼らのもとへ提出された案件について」裁定します。たとえ Perlman の仮説をうけいれなくても、手続きはほぼ同じままです。

この碑文をどう解釈するかは、*neotas* のグループの規模をどう考えるかに影響します。彼らは Perlman が示唆するようにたった一人の役人だったのでしょうか、それとももっと大きなグループだったのか、あるいはいっそ、これまで考えられてきたとおり、ゴルテュンの *neoi* 全体なのでしょうか。実際、τρια[κατίων π]ᾳριόντων「出席している三百人」は、ゴルテュンの民会から選抜されたグループではなく、たぶんポリスの *neoi* から成る、なんらかの「小民会」だったとすら主張されています。それが事実なら、*tōn triakatiōn pariontōn* というふうに冠詞がつくはずでしょう。ですから、この仮説は否定できると思います。

ほかの碑文を見てみましょう。お手もとの配布資料 No.5 は、*Inscriptiones Creticae* IV 163 です。建築用石材に刻まれているこの碑文のうち、左側の余白だけが保存されています。その年代は、字体にもとづくなら、銅貨にかんする決議に非常に近いようです。校訂者は「前 3 世紀の洗練された字体、162 の碑文によく似ている」と示唆しています。この碑文の三日月状のシグマにも注意してください。

[----------]
[.....]ω δ' ὁ ἐδδ[----------κατ]-
[αλλ]ά̣δδων, αἰ μὴ τιθ[-------]
[...]νον ἃς κ' οἵ κα παλ[-------]
4 [.] κ̣αταλλάδδεν η.[----------]
νοι πεύθεν καθάπε̣[ρ----------]
[.]λι. αἰ δ' ἁ νεότας μὴ [------]
μ̣ένα αὐτοῖς ἐν̣ [----------]
8 Διοπεῖος δὲ κορμ[----------]
ἐν πέντε ϝέ[τεθι----------]
.αιεν ἢ τα[----------]
ἄ̣ντιπα̣[----------]
12 η̣ν σ[----------]
[----------]

碑文がとても断片的なので、わたしは訳をこころみませんでした。銅貨にかんする決議碑文の幾つかの構成要素がここに再びあらわれています。5 行目の *peuthen* は *peuthō/punthanomai* は「知らせる」の不定法です。いつもの *ai mē*「もしも～しない場合には」の句は、2 行目にあります。4 行目の *katalladden* は *katallassō*「両替する」「交換する」の不定法ですが、「違反する」という意味もあります。この講演の目的にとって、もっとも重要なのは 6 行目です。*ai de neotas mē*「もしも *neotas* が～しないならば」

シチリアの尊敬すべき碑文学者 Giacomo Manganaro がこころみたこの碑文の復元は、いくらか想像に頼りすぎています。わたしは Manganaro の復元案を、その価値はあるので皆さんにお配りしましたが、ここで詳しく論じることはしません。

No.3a　*SEG* 28 732 (G. Manganaro in *Scritti Zambelli*, 1978, 229–30)

[— — —]ω δ’ ὁ εδδ[— — —]
[δικ]άδδων, αἰ μὴ τιθ[ῆται δικαίως(?) νόμισμα]
[και]νὸν, ἃς κ’ οἵ κα παλ[αιὸν ἔχωντι μὴ φωνίων]-
4 [τι] καταλλάδδεν ἢ [— — — κλαρώμε]-
νοι πεύθεν, καθάπε[ρ τᾶς νεότας ἔγγραπ]-
[τ]α̣ι· αἰ δ’ ἁ νεότας μὴ [κρίνῃ πορτὶ τὰ μολιό]-
μενα αὐτοῖς, ἐν[δειχθῇ(?) — — — μηνὸς ἐν εἰκά]-
8 δι· ὁπεῖος δὲ κόρμ[ος ἦι, δικαστὰνς αἰλ]-
ἐν πέντε ϝε[κατέρη, τᾶι δὲ πόλι ὅτι κα πρά]-
[ξ]αιεν ἢ τὰ[ν ἡμίναν διδόναι τῶι νικάσ]-
αντι, πλ̣[ίον δὲ μὴ — — —]
η̣νσ[— — —]
— — —

6〜7 行目の μωλίω は「係争する、訴訟をおこす」という意味　ὁπεῖος については Chaniotis, *Verträge* no. 71 を参照

おわかりのように、*neotas* にかかわる行は銅貨にかんする決議にもとづいて部分的に復元されており、その意図はあきらかに二つの碑文を関係づけることでした。けれども、καθάπε[ρ τᾶς νεότας ἐγγραπτ]α̣ι「*neotas* が決定したように」（5 行目）；[νόμισμα και]νὸν「あたらしい貨幣」（2〜3 行目）の復元にはなんの根拠もありません。たとえ、銅貨にかんする決議にさかのぼる器用な引用だとしても、「あたらしい貨幣」には一つも類例はないのです。αἰ δ’ ἁ νεότας μὴ [κρίνῃ πορτὶ τὰ μολιό]μενα αὐτοῖς「もし *neotas* が彼らのもとへ（あるいは彼らによって？）持ち込まれた案件について裁定しなかった場合には」の μὴ [κρίνῃ] はまったくの推測です。

Manganaro は、*neotas* を、措置を強制するよりもむしろ告発する（ἐγγραπτα̣ι）グループに変えたいようです。ともあれ、彼の見解でひとつ正しいのは、8 行目の *hopeios* は *di* と切り離されるべきだということです。最初の校訂者はここに Diopeios という人名を読んで「誰でもコスモスである者は〜しなければならない〜五」と復元しています。

次の碑文はもっと助けになるでしょうか？

No.6a. お手もとの配布資料には *IC* IV 164 があります（もっとおおまかに前 3 世紀のものといわれています）。これは民家で発見されました。

ここに拓本の写真があります。わたしのみるところ、字体はこれまで見てきた幾つかの碑文よりも古いようです。拓本のうえに、残りの部分よりも小さな文字で刻まれた最初の行があります。これは実のところ、リテュムナ出身のある人物（＝*IC* IV 207）に授与されたプロクセニアで、前 3 世紀のものといわれています。このきわめてはっきりと定型化された行の存在は、実際に、その下の碑文が右側でおよそ 16 文字分長かっただろうということを示します。左側にも、プロクセノスの名と父名の始めの部分のためのスペースがあったにちがいありません。

Adalberto Magnelli は、1998 年に刊行された論文のなかで、この碑文の年代を前 3 世紀の前半と推定しています。R.F.Willetts もまた、1954 年の論文 The *Neotas* of Gortyn のなかで、この碑文は *IC* IV 162, 163 より古いかもしれないと考えています。字体は、たしかに、これまでに見た二つの碑文の字体よりも古いものです。前のテクストよりいっそう断片的な状態をお詫びします。

[- - - -]οδόκω Ṛιθύμνιος Γορτυνίων π[ρόξενος αὐτὸς καὶ γένος].

[- - - -]η̣νίωι τὸν ἀδικίοντα κα̣[- - - -]
[- - - -]καιρυθ̣νιδονσι κημπαισ[- - - -]
[- - - -] νεοτατεύοντα μὴ εν[- - - - -]
4 [- - - -] κ’ ἀφιστάντες ὅν κα[- - - - - -]
[- - - -]ε̣ν̣[- - - - - -]θ[- - - - - - - - - - - -]
[- -]

l. 2, καὶ ῥυθ⟨μ⟩ίδονοι κημπαίσ[δονσι - - -] Manganaro 1978.

この碑文には、動詞 *neotateuō*（3 行目）が初めてあらわれます。これは分詞の単数対格形です。4 行目の ἀφιστάντες は、複数形であり、したがって、同じ主語を持つことはできませんが、一年の終わりに「職を辞す」という意味で使われているのかもしれません。それは、ἐπιστάμενος κόσμος「在職中のコスモ

ス」の場合のように、動詞 ἐπίστημι または ἐπίσταμαι と比較することができるかもしれません。この複数動詞の主語は、*ha neotas*（Bile 312）のような、集合名詞としての単数形かもしれません。それゆえ、単数形の個々の *neotateuōn* について、一年の終わりに職を辞す集合的な *neotas* を考えることができるかもしれません。

Adalberto Magnelli は、この断片を、ラトとオルスの協定碑文断片（前 111/110 年：*IC* IV 5　これはお手もとの配布資料の No.6 b に一部だけが引用されています）と比較して解釈しようとしてきました。この協定には、οἱ πρείγιστοι οἱ ἐ]πὶ τα[ῖς] Εὐνομίαις とよばれるグループが言及されています。Magnelli は、いま問題にしている碑文の τὸν ἀδικίοντα が、ラト・オルス協定の 38 行目にある αἰ δὲ τις ἀδικήσηι と非常によく似ており、ゴルテュンの碑文の καιρυθνιδονσι が（μ が ν に変わって）ρυθμίττον[τες]という形でラト・オルス協定の 35 行目に再登場することに注目しています。これは、実際に正しいようです。しかしながら、彼の主張の次のステップはもっと大胆です。

『ヘレニズム期のクレタ諸国間の協定碑文集（*Verträge zwischen kretischen Poleis in der hellenistischen Zeit*）』における Angelos Chaniotis の長くて魅力的なラト・オルス協定碑文にかんする議論を手がかりに、Magnelli は、この協定碑文の当該箇所は、二つの国々の境界地域で放牧する人々の紛争統制にかかわっているという Chaniotis の解釈をうけいれます。Magnelli はいくらか迂遠な方法で、いま問題にしている碑文もまた、境界地域の統制に関係しているかもしれず、たぶん若者から成っていた *neotas* は、ほかの地方で知られる *peripoloi* と *kryptoi*（領土のパトロール隊）や *horophylakes*（境界ないし山岳地帯の番人）とまったく同じように、これらの境界地域をパトロールするのに適切なグループだったろうと考えます。アッティカでは、『アテナイ人の国制』から知られるように、国境警備隊はエフェボイでした。彼らは、すくなくともアテナイ領にある国境要塞の幾つかで任務に就いたのであり、そこで Magnelli は、アテナイのエフェボイは、どうかするとクレタの *Eunomia* の維持にあたる人々のアテナイ版だったかもしれないと考えます。そして、実際 Magnelli は、結局、エフェボイ、あるいはそのクレ

タ版である *agelaoi* にかんする説明をすることになるでしょう。

Magnelliが2010年に刊行した *Gortina* VII: *Supplement to the Inscriptions of Gortyn* のなかでは、このような論理が、以下のように、いっそう発展させられています。イタリア語から翻訳すると「*neotas* は（中略）、領土における国家の経済的な利益をコントロール・保護することを任務とし、市場でのあらゆる商取引の監督も同時におこなっていた、特別な見習い市民グループとみなすべきである」

たしかに、ゴルテュンとクレタのほかの地方で、国境沿いの砦で守備任務に就くそのような部隊がいた証拠はいくらかあります。守備兵は ὦροι とよばれ、砦そのものは οὐρεῖα とか ὠρεῖα とよばれます。これらの語は、「国境警備隊」を意味するホメロスの οὖρος と ἐπίουρος に由来しています。ゴルテュンの *preigistos* に指揮されたこのような ὦροι が、ゴルテュンの属領の小島カウドス、現在の Gaudos、ヴェネツィア時代の Gozzo にいたことが知られています。ある愉快な論文のなかで、Henri van Effenterre もまた、碑文によってではありませんが考古学的に、似たような若い国境警備兵たちの痕跡を、オクサ山地にある一連の小さな、というよりちっぽけな砦にたどっています。ここはまさしく、オルスとラトの領土が交わるところでした。そのような砦の一つは、全周 9×7m という小さなものですが、そこで任務に就いていた若者たちの思い出をいまなおとどめています。van Effenterre の文章を（フランス語からの翻訳で）引用するにこしたことはないでしょう。「この砦へ登ってくる人は、その入り口から 10m ぐらいのところにある大きな岩に刻まれた歓迎の言葉 *chaerete*「ようこそ」にむかえられる。すぐ近くには、一つの鏃と一人の弓兵の姿が、この監視所をゆだねられていた者たちを思わせる。あたり一面に自分たちの名を刻んだきびきびした若者たちは、弓兵の一隊に所属していた」

Van Effenterre が字体から前 3 世紀末のものとするグラフィティのなかには、つぎのような表現で若い徴集兵たちの完璧さを称えるものがあります：*kles aristos*「クレスは最高」 また、楽しげな乙女たちのひとにぎりの肖像は、「オルスの優雅な乙女たち」とよばれた娘たちにちがいありません。彼女たちの踊りの技量は、すぐ近くのグラフィティのなかで言祝がれています：χόρωι καλά

「愛らしく歌い踊る」　入り口のすぐ右にある岩には、砦から町までの距離が刻まれています。28 スタディオン、すなわち約 5km というのは、まさしくオルスからこの遺構までの距離にあたります。van Effenterre は、ノスタルジーをこめて、この距離表示は退屈した若い弓兵たちが自分で刻んだものだろうが、公式の里程標でもあったかもしれないと考えています。

しかし、オルスの国境地域をパトロールしていたこれらの若い *periboloi* と、ここで問題にしている *neotas* を結びつけるには、いささか想像力を必要とします。どうすれば Magnelli が検討した碑文断片から国境の山地にたどり着くことができるのかを探りだすために、ラトとオルスのイソポリテイア・シュンマキア協定（前 110/109 年または前 109/8 年）に目を向けてみましょう。わけても、ラト・オルス協定にかんする Chaniotis の議論に注目しましょう。幾つかのコピーのかたちで現存している、このとても長い碑文から、関係のある箇所だけを引用します。

6b　ラト・オルスのイソポリテイア・シュンマキア協定（前 110/9 または前 109/8 年）

30　　καἵ κα κοσμίων [ἕλ]θηι Λάτιο[ς ἐς Ὀλόντα ἢ Ὀλόντιος]
ἐς Λατών, τ[ό τε ἡμά]ṭιον ἀφφανῶ ἐχέτω καὶ ἐρπέτω ἐς π̣[ρυτανήιον καθώς]
κα οἱ [κόσ]μ[ο]ι ἐς [ἑορ]τ̣ὰν ἢ ποππὰν [ἕρ]πωντι. αἰ δὲ πλ̣ίονεν ἕ[ρποιεν Λάτιοι(?)
ἐς Βο]-
λόεν̣τ̣α̣ ἢ Ὀλόντιοι ἐ[ς Λατὼ]ν παρ’ ἄτερ[ο]ν ἥσ̣θ̣ω ὁπῆ ἄγχι διω[ρισ- — — — —]
[— — — — πρ]εισ̣γήιας ἕρπ[ε]ν̣. [Αἰ] δὲ τί κα̣ ἕληται Λατίωι ἢ Βολοντί[ωι,
ἐπιόντων [οἱ **πρείγιστοι**]
35　[οἱ ἐ]πὶ τα[ῖς] εὐνομίαις οἱ ἑκατερῆ ἐρευνίοντες καὶ ῥυθμίττον[τες καὶ ? - - - - - -]
πρὸς αὐσαυτὸς καὶ τἄλλ[α] πάντα χρήμενοι καθὼς κα ἐπεικ[ὲς ἦι. ʼΗμεν]

[δὲ] καὶ τὰς ὁδὸς τὰς ξε[νι]κὰς θίνας· αἰ δὲ τίς κά τινα ἀδικήσηι ἐν τα[ύταις ταῖς
ὁδοῖς]
ἀ̣π̣οτεισάτω ἐξαπ[λόα τὰ π]ρόστ̣ι̣μα δίκαι νικαθές. ἦμεν δὲ καὶ ἐπιγα[μίας
ἀλλάλοις...κτλ.

35: [τες καὶ κυρίοι ἔστων] Chaniotis

「また、ラトのコスモイがオルスへ行くとき、あるいはオルスのコスモイがラトへ行くときには、外衣（ヒマティオン）を開いて？着用し、コスモイが祝祭や祭列へ行くときと同様にプリュタネイオンへ行け。また、より多くのラト人がオルスへ、あるいはより多くのオルス人がラトへ行くときは、相手方（のポリス）では、近くで決められた場所にいろ？［欠損］使節団は行け？［欠損］もしもラトまたはオルスにおいて何かが盗まれた場合には、*eunomiai* を管轄する *preigistoi* がとり扱い、彼らはそれぞれの（ポリス）で、捜査と秩序の回復をおこない［欠損］ほかのすべての事項についても互いに（和解させ？）しかるべく処理せよ。*xenikai hodoi* は神聖であれ。なんぴとかがこの（*xenikai*）*hodoi* で不正をはたらいた場合には、敗訴したなら、六倍の罰金を支払え。相互に通婚権があれ」

Chaniotis のコメントを翻訳して引用します。「前 2 世紀後半のクレタ諸ポリス間の国際的な合意事項を含む一節で、移牧に関連する安全上の問題にかかわっている（中略）。*xenikai hodoi* という用語は、クレタ ペロポンネソス フォキス、そしてシケリアでも、ふつう山岳地帯と関連して使用されている。こうした移牧ルートの安全に責任を負う役人を πρείγιστοι οἱ ἐπὶ ταῖς εὐνομίαις という。似たような名称を持つこの種の役人は、ラト オルス アプテラ ポリュレニアといったクレタの幾つかのポリスでも知られている。彼らは、ふつう、聖域で執りおこなわれる建築物の奉納にかかわる碑文のなかに言及されている。けれども、そのことは、かならずしも、この役人団のおもな職務が聖域の修復や管理にあったことを意味するわけではない。これらの役人たちの職務にかんする決定的な史料は、すでにふれたラトとオルスの協定碑文で、この史料から、この役人団の構成員が〈外国人の道〉での誘拐や窃盗の事案（αἰ]δὲ τί κᾳ ἕληται）に介入したことを推測することができる」

彼の論証のポイントは、（復元された）*preigistoi*（かならずしも生物学的な年長者ではなく、むしろ上位の階級を意味します）という要素を含む文が、*xenikai hodoi* にかんする次の文と関係づけられるべきだという点にあります。これは国外の諸地方へいたる道、ほかのポリスへ旅する人がたどる幹線道路で

す(Chaniotis はそれらを Fremdenwege とよんでいます)。この点で、Chaniotis は、わたしが思うに、van Effenterre のもう一つの愉快な論文 Quérelles crétoises に依拠しています。しかし、史料はこの解釈を不可避にするものではなく、逆にもう一つの論理展開を不可避にするとわたしは主張したいと思います。誘拐と窃盗の直前の文は、二つのポリスの役人相互の訪問にかかわっています。すなわち、クレタのおもだった役人であるコスモイについて、そしてこれらの役人たちが、到着するときどんな服の着方をすべきか (興味深い！)、さらに彼らがどこに宿をとるべきか (プリュタネイオンに)、あるいはもっと大勢が一方のポリスから他方へ到着したときには、どうすべきか。もし次の一節が、*xenikai hodoi* にかんする件よりむしろ、こうしたことにかかわっているとみなすなら、この一節を、それぞれのポリスで、相互の訪問の際に、関係する役人たちが職権を発動すべき場合と読むことができるでしょう。この解釈は、*eunomiais* という複数形が使用されている理由を説明するかもしれません。というのも、二つのポリスのそれぞれに、関係するいろいろな役人団がいたかもしれないからです。

そこで、ラト・オルス協定のなかのこれら特定の節は、一方の市民が相手国で窃盗をはたらいた場合に、こうした役人たちが事件を管轄するかぎりで、移動する人々にかかわっているということができましょう。*xenikai hodoi* を扱っているのは、「不法行為 (明示されていません)」をはたらいた者は裁判にかけられるという、その次の節だけです。これら移動中の人々は、牧人でなくてもよく、窃盗も家畜泥棒とはかぎらず、その窃盗も *xenikai hodoi* でおこらなくてもよいのです。じつのところ、*xenikai hodoi* に続く文は、二つのポリスのあいだの通婚権すなわちエピガミアにかかわっており、その次の文は売買にかんする規制の話です。つまり、非常に長いいろいろな案件の一覧があるわけで、それらは前後の項目と関係があるとはかぎらないのです。

しかしながら、Chaniotis が、[οἱ πρείγιστοι οἱ ἐ]πὶ τα[ῖς] εὐνομίαις は街道と郊外地区をパトロールする任務を負っていたという主張をうらづけるために引用している、ほかの幾つかの史料があります。それらはすべて、*Eunomia* というグループによって聖域のなかで、あるいは聖域へ、奉納された碑文ですが、

preigistos という語は出てきません。そのうちの一つは、クレタ西部のポリュレニアで出土した、*syneunomiotai* と自称するグループによるパンへの奉納碑文です。Chaniotis は、示唆をこめて、これらの人々の奉納碑文を、デルフォイ領のコリュキア洞窟で見つかった、パンとニュンフへの前 3 世紀の奉納碑文（Robert 1937, 108–10; Rousset No 26; Chankowski 359）と比較しています。この奉納碑文は、エウストラトスとその同僚の国境警備兵たち、すなわち *symperipoloi* が捧げたものです。この知見は、さらなる－興味深い－示唆をもたらします。すなわち、*Eunomia* という語は、「よい秩序」を意味する「法」や「秩序」から派生したものではなく、むしろ *nemein* の意味でもある「放牧する」から派生したものであり、したがって *epinoima*「放牧権」と関係があるという示唆です。実際、*syneunomiotai* は、Gaetano de Sanctis によって、すでに、法執行にかかわる監督グループではなく、Hirtenverein「牧人組合」と解釈されたことがあります。わたしは、どちらかといえばこの考えに賛成したいのですが、信ずべきものかどうかは確信を持てません。

けれども、Chaniotis は de Sanctis のこの主張をしりぞけ、*Eunomia* のグループを、ほかの地方でもみられる郊外地区の監督役である *horophylakes* と *eremophylakes* に相当するものとみなします。ラト・オルス協定に見える *epi tais eunomiais* という複数形は、Chaniotis によれば、この解釈をうらづけます。移牧の存在が知られていて、移動する牧人たちが日常的に国境を越えていたヘレニズム期のクレタにあって、*eunomiotai* のもっとも重要な任務の一つは、家畜泥棒や迷った家畜の所有権をめぐる喧嘩といった、牧人同士のもめごとを解決することだったにちがいない、というのが彼の結論です。「*Eunomia* は、外国の家畜の頻繁な越境にかかわる問題を扱う役人団だったことがわかった。公式名称は、たぶん、〈秩序正しく放牧させることを任務とする年長者たち〉と訳せるものだっただろう」

クレタとクレタの碑文にかんする Angelos Chaniotis の知識は余人の追随をゆるさないものです。彼が描いたクレタの郊外地区の実態をみとめるにしても、彼によるこれら特定の史料の復元が、大半は推測による根拠にもとづいていることを理解せねばなりません。

ゴルテュンと *neotas*、それに最近になって公刊された二つの碑文に話を戻しましょう。一つ目の碑文は、Adalberto Magnelli が 1998 年に公刊したもので、いまはゴルテュン出土碑文の 2008 年の補遺史料集に No.21 として収録されています。これは現地産の石灰岩のブロックに刻まれた、左端だけが残っている碑文で、ゴルテュンの音楽堂（オデイオン）の近くで見つかりました。この碑文の年代は、これまで検討してきた幾つかの碑文よりも 1 世紀以上くだることに注意してください。このことは、もし何か証拠が必要なら、*neotas* が特定の事態に対処するための臨時の組織ではなくて、ゴルテュンの国家機構の一部であったことを示しています。

7. A. Magnelli, ‘Una nuova iscrizione da Gortyna (Creta). Qualche considerazione sulla neotas’, *ASAA* n.s. 54-55 (1992–1993) [1998] 291–305 (*SEG* 48 1209). Magnelli, ‘Gortina VII’に、写真とスケッチとともに No.21 として採録

ΑΝΕΟΤΑΣ[----------]
[.]ΩΘΕΥΓΙΝ[----------]
ΕΚΟΡΜΙΟΝΟ[----------]
4 [.]ΜΝΑΤΩΟΝ[----------]
ΟΣΙΑΡΟΡΓΟΣΣ̣[----------]
[..]ΩΣΟΑΡΧΟΣ[----------]
[..]ΛΙΔΑΜΩΙ̣[----------]

Ἁ νεότας [ἁ σὺν τῷ δεῖνι]	*Ha neotas [ha sun tôi deini]*
[vel ἁ ἐπὶ ἀρχῶ δεῖνος?]	[vel: *ha epi archô deinos*]
[τ]ῶ Θευγίν[ιος ανέθηκεν (?)]	*tô Theugin[ios anethèken]*
ἐκόρμιον οἵδε· ὁ δεῖνα τῶ]	*ekormion hoide. ho deina tô*
4 {Ἁ}μνάτω, Ον[---τῶ--------]	*Amnatô On[----------]*
-ος ἰαροργος, Σ[---τῶ-------]	*- os hiarorgos S*
[..]ω, Σόαρχος [τῶ δεῖνος, ὁ δεῖνα τῶ]	*[..]o Soarchos*
[Κα]λλιδάμω κ̣[όρμων μνάμων ------]	*[Ka]llidamô k[ormôn mnamôn]*

1 行目の Ἁ Νεότας [- - - - - -]のあとには、おそらく奉納者の名があったのでしょう。一人の人物の父称が残っています（*neotas* のおもだった役人でしょう

か？)。コスモイのグループの場合とまったく同じように、一人の監督者を含む役人グループがあるようです。続く数行では、碑文はその年の（ἐκόριμιον：3 行目）（5 人？）のコスモイの名をとどめています。そのなかには、5 行目に別に言及されている *hiarorgos* がいます。コスモイのグループは、ふつう 10 人でしたが、いつも全員が言及されるわけではありません。*hiarourgos* は、神託うかがいを含む神事にとくに関係する役人団の一人です。

この碑文は、一つまたは二つ（？）の役人団による年度末の奉納碑文の体裁をすべてそなえています。驚いたことに、Magnelli は、この碑文の注釈のなかで、当該碑文は、おそらくヘルメスへの奉納碑文だと主張しています。その理由はつぎのようなものです。1）碑文が、アゴラの近くで発見されたこと、2）*neotas* は（銅貨にかんする決議から推測されるように）市場を監督する権限を持っていたこと、3）*neotas* は若者（たぶんエフェボイか *agelaoi*）によって構成されていたこと、4）ヘルメスは商業とギムナシオン、それに若者の神であること。わたしは、いますぐにはコメントしません。

もう一つのあたらしい碑文は、これも前 3 世紀後半のもので、Magnelli によって 2008 年に初めて公刊されたのですが、一見したところ、彼の最初の復元をうらづけるように思われます。これは難解な碑文です。Magnelli によれば、数少ない文が三つの断片のうえに残っており、断片 a と b は接合します。これは、ゴルテュンともう一つのポリスとの、ある協定の一部です。*neotas* は、*hiarourgos* が、任期中に、名指しされていない神殿でしかるべき供犠を執りおこなわなかった場合に科される罰金を徴収する権限を持つ役人として言及されています。この碑文は、かりに前 3 世紀後半に年代づけられています。

接合する二つ（a＋b）を含む三つの断片　三つとも、もとは現地産の多孔質の石の一つの大きなブロックの一部であり、ミトロポリ（南西方向へ約 1km）にあるバシリカの壁面に流用された状態で見つかった。前 3 世紀後半の字体　写真は小さすぎて転載できない。

a+b

----------traces----------

[---]ΑΓΓΕΛΛΟΝΤΩΝΤ. . . ΙΑΡ[c. 5]ΑΙΑΡΟΡ[----------]

[---]..Ε̣.Ο̣ΙΑΡΟΡΓΟΣΤΑΣΑΜΕΡΑΣΠΕ[c. 2]Ε̣ΤΑΣΑΡΓΥ̣[----------]

[---].Ε̣ΣΔΕΤΑΙ̣ΔΔΕΚΑΚΑΜΕΡΑΙ̣Σ̣ΗΙΑΛΛ.ΛΑΣΕΠΑ̣Ρ̣Α̣ΣΗΠΕΡΙΤ̣[----]

4 [---]Ι̣ΑΡΟΡΓΟΣΕΦΩΧΙΑΡΟΡΓΙΟΝΤΟΣΕΛΛΙΠΗΙ[c.4]Ο̣ΙΩΙΚ[c.3]Ε̣Ν[-]

[---]..ΠΡΑΞΑΝΤΩΝΑΝΕΟΤΑΣΑΡΓ̣[----------]

----------traces----------

[---- παρ]αγγελλόντων τοῖς ἰαρ[οῦσι *vel* -έυσι κ]α⟨ὶ⟩ ἰαρορ[γοῖς----------]

[---].ε . ὁ ἰαργοργὸς τὰς ἁμέρας πέ[ντ]ε τὰς ἀργυ[ρίω δαρχνὰς λαμβάνειν?---]

[---ἐξορκίζαντ]ε̣ς δ' ἐ⟨ν⟩ ταῖδ' δέκα κ'αμέραις ἦι ἀλλ[ά]λας ἐπαρὰς ἢ περὶ τ[-τιθῆται vel ποιῆται?---]

4 [---ὁ] ἰαροργος ἐφ' ὥχ' ἰαρογιόντος ἐλλίπηι [ἐν ὁπ]ο̣ίωι κ[α μ]ε̣ν[ηι ἰαρῷ θύσαι----------?]

[---] πραξάντων ἁ νεότας ἀργ[υρίω δράχνας xx *vel* στατῆρανς xx----------]

「[欠損]（彼らが）祭司たちと *hiarourgoi* に命じるとき［欠損］*hiarougos* は 5 日のうちに銀 20？ドラクマを受けとれ？[欠損]（双方の *hiarougoi* は？）10 日以内に宣誓をなしたのち、その際？互いに呪いをかけよ？もしも *hiarourgos* が在職中に、彼が勤務するいかなる神殿においても、供犠？を怠った場合には［欠損］*neotas* は銀 20 スタテルを徴収せよ」

c

---------- traces ----------

[---]ΤΕΤΑΡΤΟΝΑΙΔΕΠΡ..ΕΙΠΑΡ̣[----------]

[---]Μ̣ΕΝ̣..ΚΗΧΕΤΩΤΟΔΕΙΑ̣ΡΟΝΤΟΤ̣ΕΤ̣[----------]

[---]Ν̣ΣΕΓΓΥΟΣ.ΑΡΓΥΡΙ̣ΩΔΑΡ *v*ΨΨ[----------]

4 [----------]ΑΙ̣ΣΑΙ̣[----------]

[----]τέταρτον· αἰ δὲ πράξει παρ[ά----------]

[μωλῆν δὲ τὸν βουλό]μ̣ε̣ν̣ο̣ν̣ κὴχέτω τὸ δὲ ἰα̣ρὸν τὸ τ̣έτ̣[αρτον, τὸ δὲ τέταρτον τὸν μωλίοντα?---------]

4 [---καταστασάντων ... ἑκάτεροι τὸ]ν̣ς ἐγγύος, ἀργυρ̣ίω δαρ(χνὰς) ψψ [----------]

[----------]ΑΙ̣ΣΑΙ̣[-----]

「［欠損］四分の一　もしも［欠損］から徴収する場合には［欠損］望む者は通報せよ、そして神殿は四分の一を取れ、また四分の一は通報者？（が取れ）［欠損］各自は 2000 ドラクマ相当の供託金？を支払え」

Magnelli は、この碑文をゴルテュンと、ある不明なポリスとの協定（イソポリテイア？）の一部とみています。碑文は宗教的な色あいのもので、両ポリスの使節たちが祭司たちと *hiarourgoi* に、なんらかの祭儀をおこなうよう求めています。彼の主張によれば、その祭儀は、たぶん二つのコミュニティの境界地域にある聖域で執りおこなわれたのでしょう（ただし、これは一つの推測です）。2 行目では、金銭の徴収が、執りおこなわれるべき供犠と関係づけられています。それから、10 日間の猶予をおいて双方による宣誓がなされ、宣誓の末尾で役人たちが違約者に呪いをかけます。ギリシア語は、まったく明瞭というわけではありません。趣旨は、*hiarourgos* は、任期満了までに供犠を執りおこなわない場合には罰金を科され、*neotas* がその徴収にあたるということのようです。

この碑文が境界地域にある聖域にかんするとり決めにかかわるものであるとすると、ここでの *neotas* の役割を、境界地域と、したがってこの聖域をパトロールするという任務と結びつけることができます。そして、そうならば、問題は境界地域とパトロールへ戻ることになります。けれども、そのような再構成の大部分は、ほかの史料を関係づけるように解釈し、この若者たち（*neotas*）をポリスの領土の辺境へ押しやろうという熱望をこめて－そのようなものにわたしには思えるのですが－たてられた推測です。そして、もしも皆さんが、ポリスの辺境守備の任に就きながら隠遁と疎外のひとときを過ごすのは、実は *neoi* ではなくてエフェボイの通過儀礼ではないだろうかと訝しく思われるなら、Magnelli の注釈のなかにその議論が示されています。

1）ラト・オルス協定にかんする Chaniotis の解釈によれば、*preigistoi epi tais eunomiais* すなわち *Eunomia* のグループは、*xenikai hodoi* の監視にかかわっていました。

2）ほかの多くのポリスでは、国境は、たいてい若者からなる *peripoloi* によって守られていました。アテナイではエフェボイがその任務を負っていました。

3）したがって、ゴルテュンの *preigistoi epi tais eunomiais* は、領土の警備にあたってエフェボイ（クレタでは *agelaoi* とよばれます）の支援を受けていたかもしれません。

4）*neotas* という語はあいまいです。*neos, neotas, neaniskoi* などの語の意味は広いのです。クレタの年齢階梯集団についてはよく知られています。17 歳までの *paides* に続くのは 17 歳から 20 歳までの *agelaoi*（アテナイのエフェボイに相当します）であり、それに続くのが *dromeis*（文字どおりには「走者」）です。成人年齢は 20 歳です。このような多様な用語を前にして、Magnelli は、クレタの *neoi* と *neotas* は、たぶん、20 歳以上のグループよりも、年齢階梯の二番目のグループ、つまりエフェボイと、もっともよく結びつけられると考えています。

ここまで吟味してきた史料にもとづくとき、ゴルテュンの *neotas* について、ほんとうにいえることは何でしょうか。銅貨にかんする決議には、*neotas* は不正行為の告発を受けつける組織として登場します。いいかえれば、彼らの役割は法の執行で、経済的なものではありません。わたしが思うに、一連の奉納碑文は、端的に、（下級の？）役人団による任期終了時の奉納でしょう。最後に検討した碑文からは、復元が正しければ、*neotas* が罰金徴収、すなわち執行任務に従事しているのがわかります。以上が断片よりも保存状態のよい碑文から知りうることですが、断片もおおむねそれをうらづけています。No.6a の碑文の、*neotateuonta* は、*prostateuein*「*prostates* の任にある」という動詞から類推すれば、「彼が *neotas* の任にあるときに」というような意味にちがいありません。

これらの問題ぶくみで断片的な碑文から一般的な結論を引き出すのは、容易なことではありません。規則の執行や遵守、わけても罰金徴収にかかわる任務に従事する、一年任期の下級の執行役人のグループに驚くほどよく似た印象が残ります。市場の監督は彼らの任務ではありませんでした。

ゴルテュン・リュットス戦争期のゴルテュンの内紛の基調となった年齢区分がこの役人団の創設の背景にあったことは、否定しがたいと思います。これらの役人団が、この悪夢のような戦争のあとで、一種の和解のジェスチャーとして創設されたということは、まったくありそうにないと思えます。この、わた

しの意見をうらづける史料を、これから皆さんにお示ししましょう。しかしながら、はっきりしているのは、これらの碑文に見える *neotas* という名称が、*neoteroi/neoi*、すなわち 30 歳以下の市民全体を意味しているということはありえないということです。それは、より大きな年齢階梯集団から選ばれた（一年任期の）役人団を指しているにちがいありません。彼らが、コスモイのグループの助手、実務をおこなう手下で、この重要な役人団の見習いをしていたという可能性はあるでしょうか。もしそうなら、彼らが任命された理由が革命的なムーブメントだったということは、まったくありえないでしょう。彼らはむしろ、エリートの若者であり、伝統主義的で貴族主義的なシステムを体現していたかもしれません。これは推測ですけれど、すくなくとも、この役人団の名称をあるいていど説明します。下級の役人たちが、このような非常に特殊な名称を持っているというのは、たしかに興味深いことです。これがもっとクレタ全体に共通する慣習だったことが、いくらかでも確認できればよいのですが。ほかの多くのポリスでも、若者たちは年長者にゆだねられるまえに、なんらかの役職を与えられたのではないかと思います。

わたしが、*neotas* が、すくなくともこれらの碑文から知られるかぎりでは、郊外地区の警備や、*xenikai hodoi* を通ってくる家畜を追う牧人たちの秩序維持にかかわっていたという考えを疑問視していることを、はっきりさせておかねばなりません。わたしは、van Effenterre がそのすばらしい一端をかいま見させてくれた辺境の小さな砦を、たぶん退屈しながら守っていたのが、ギリシアのほかの地方で、いつもエフェボイだったわけではないにしろ若い徴集兵が領土をパトロールしていたのとちょうど同じように、クレタの若者たちだったことには、全面的に賛成です。

一つの興味をそそる碑文にふれて、この講演を終わりましょう。これはずっと古いもので、前 5 世紀、前 480 年から前 450 年にかけて、牛耕式で刻まれています。お手もとの配布資料の最後の碑文です。発見されたのは、ゴルテュンのアポロン神殿の近くです。

IC IV 89　GORTYNA — *boustr.* — c. 480-c. 450a.

[----------]
[----------]ο[----------]
[----------δ]εκσάμενον δ[-------]
[----------]δεν ἢ ὀ τᾶς θα[------]
4 [----------]ας ἢ μὲ δέκσαι[το---]
[----------α]ἰ μὲ θάνατος [--------]
[----------]ōντι ϝεκαστο[--------]
[----------]ς κ' αἴ κ' ὀ τô κσε[--]
8 [----------]α κατασταση[---------]
[----------] στατêρανς ο[--------]
[---- ἐπ]ε[λ]εύσαντα [----------]
[----------]εκατοσ[----------]
12 [----------]εκε..[----------]
[----------]

内容の意味はたいしてとれません。2 行目には、受けとる人：*deksamenon*；4 行目には「なんぴとかが受けとらない場合には」：*ē mē deksaito*；5 行目には *thanatos*「死」　3 行目には、[----------]δεν ἢ ὀ τᾶς θα[------]という、非常に奇妙な単語の組み合わせがみられます。本文はつぎのようになっています。

Δ E N E O T A Σ Θ A
D E N E O T A S TH A

これは、別の区切り方をするなら、意味がもっとはっきりするでしょう。

Inscriptiones Creticae の編者である Margarita Guarducci は、このような読みの可能性を論じはするものの、否定します。それは、彼女が、ほかの学者たちと同じく、*neotas* を「内戦の混乱のなかから生まれた若者グループ」と考えていたからです。けれども、彼女は誤っていると思います。ここにみられるのは、ほぼまちがいなく、これらの断片的な碑文を通して見てきたのと同じ役

人グループの初期の証拠です。ですから、前 3 世紀後半の紛争とこの組織は切り離して考えることができます。それはむしろ、エリートの若者たちが限定された職責を担いながら年長者にあずけられて政治の見習いをしていた、保守的で貴族主義的な社会の一要素とみなすことができましょう。そして、そうなら、歴史家の議論がどれほど迂遠なものでありうるかを知るのは、興味深いことです。いちばんわかりきった結論はいつも正しいわけではないということを、お示しできていればと思います。